

不死身も楽じゃない

ああああ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異能^{シングル}。それはダーウィنزゲーム参加者全員に蛇が与える進化の過程。平凡な少年だった真白はあるきっかけからダーウィズゲームとシングルに出会い、その不死^{しんか}を振るっていく。

目次

プロローグ	1
宝探しゲーム 前編	4
宝探しゲーム 中編	9
宝探しゲーム 後編	14
第5話	21

プロローグ

男は追いつがる死神から逃げていた。携帯電話のソーシャルゲーム。通称Dゲーム。大金に目がくらんだこの男もまたダーウィنزゲームのプレイヤーであり、エンカウントバトルで弱そうなやつを探し狩るのを専門にした新人殺しのクランリーダーだった。ほんの数時間前、六本木を歩いていたいかにも弱そうな少年を見つけ、勝負を挑んだ。ここまでではいつも通りだったはずだった。

いつも通り、数人で狙撃ポイントに誘導し狙撃で仕留める。事実、狙撃は成功した。ただいつもと違う点を挙げるとすれば、それは…打たれたはずの少年が立ち上がったことだろう。

男は確かに少年の肩と胸に銃弾が着弾したのを見た。実際に、アスファルトを鮮血が汚している。ただ、少年は立ち上がった。

時間が巻き戻ったかのように少年の体が再生しだしたのだ。紅く光る彼の視線は男たちに恐怖を抱かせた。そしてそこからは一方的な虐殺が続いた。錯乱したクランのメンバーは、連携を忘れただ銃弾をまき散らし、たった数十秒の間にほぼ全滅し、わずかに残ったメンバーもリーダーの男以外は殺された。

打たれた腹をかばいながら、必死に逃げ続けていた男だったが、体力が尽きたのか自販機の前で座り込んでしまう。

ゆっくりと焦ることなく歩いて追いついてきた少年はホルスタに収められていた拳銃を、ゆっくりと引き抜く。

現れるのは、男のクランを壊滅させた銀一色の拳銃。

「な、何なんだよ！なんなんだよお前！お前は俺の仲間に殺されたはずだろ!?確かにお前は銃弾で打ち抜かれたはずだ!!」

錯乱したように叫ぶ男の顔は恐怖と憤怒で染まっていた。

「ちくしょうが!!俺の仲間を全員殺しやがって!この…!」

もはや悲鳴にも近い、男の慟哭は彼の最後の言葉となった。

「殺したんだから殺されるんだ。当たり前の話だろ?」

銃声とともに鮮血が舞い辺り一帯を汚した。しばらくしてから転移が始まり、転移が終わるころには自販機の電源切れていた。

「ただいま」

「…血の匂いがします。先にお風呂に入ってきたらどうです？」

玄関を開け、居間に入ると珍しく部屋から出た鈴音^{レイリン}がいた。

「そうさせてもらうけど…」

「なんですか？鬱陶しいのであまり見つめないでほしいのですが」

「…相変わらず小さいな」

黒髪のボブカットにきれいな蒼瞳。左目の下の泣き黒子は魅力的で精神年齢も高く、とても中一の纏っていい雰囲気ではないが、身長が低いせいか、そこそこ長く一緒にいるせいかは知らないが、あまり色気を感じない。

「もしかして喧嘩売ってるんです？ 殺しますよ」

うわあー。レインのやつ寝不足だな。めちやめちや機嫌が悪い。めちやめちや目線が冷たい。

「冗談だって…」

「だいたい、真白だって小さいじゃないですか」

「おいコラ、身長の高さを男子にするのは犯罪だから。女子の百倍は傷つくから！っていうか、相変わらず呼び捨てかよ！一応二歳年上だぞー！」

「それより、真白」

うわ、こいつ話聞く気がないな。昔はあんなに素直でかわいかったのに…。真白さん呼びで、俺の後についてきたあの可愛い少女は何処へ…

「異能^{シギル}を… 『不死神^{ハーデス}』を使ったですね」

「ッ……………」

鋭い瞳に睨まれ一瞬怯みそうになるが、何でもないように取り繕って肯定した。

「相変わらず鋭いな。…確かに、異能^{シギル}を使った。だけど、それは鈴音^{レイリン}の

頼み事とは無関係の戦いで使用したものだし、ストックの数を見れば結果的にはプラスだ。今後の戦いに支障が出るわけじゃあない。問題は無いよ」

「そういう問題じゃないです!!!」

鈴音の剣幕に気圧され、重心が後ろに傾いていた俺はあっけなく鈴音に押し倒された。

「分かっているのですか!? あなたの異能は——」

「分かっている。分かっているさ。俺のことは俺が一番よく分かっている。でもこれは俺が選んだ道だし、俺がやりたくてやっつてることだ。それにダーウィنزゲームをプレーする上で、異能を使わないのは無理だ」

「ですが…」

色々な感情が混ざり、辛そうに、泣きそうになっている鈴音を見て少し死にたくなる。うつすらと浮かんだ涙を見て、自分の選択を少し後悔した。先ほど返り討ちにしたクランは、別段異能を使わなくても倒せたのだ。初心者や異能を使いこなせないルーキーばかりを狙う小物だ。狙撃にさえ気を付けていれば、手こずることもなかった。そもそも、勝負を挑まれる前に撒くことだってできたのだ。それをしなかったのは俺のエゴだ。

でも…今は後悔は忘れる。

「らしくないぞ。いつもの冷静さはどうした？」

「ッ…」

「鈴音にそういう顔は似合わない。いつもみたいに澄まし顔で、自分のしたいようにしてればいいのさ…」

「で、ですが…」

「鈴音は解析屋だろ? 役割の違いだ。…シャワー浴びてくる。」

強引に起き上がり、鈴音の涙を拭ってから俺は逃げるように風呂場に足を向けた。

宝探しゲーム ー前編ー

「お久しぶりですね、ダンジヨウさん」

新宿の西側に位置する年季の入った定食屋に入るとに覚えのある背中を見つけた。空手の胴着を着ているロシア人ぽい人などそうはいないと確信し、声をかけた。

「マシロか。久しぶりだな。会うのは才前が雪蘭と戦つて以来か」

彼は新宿を拠点とする克蘭【ダンジヨウ拳闘倶楽部】のリーダーであり、少しの間だけが鍛えてもらっていたことがある。

実力は確かで、日本ランキング4位の實力者で、1対1なら戦車と戦つてもと豪語するほど強い。

「はは、あの時はひどい目に遭いましたよ。彼女、ほんとに人間なのか疑いたくなりますよ」

「そうか？ 割と善戦していたように思えるガナ」

「ははっ、そりゃ僕が死に慣れているからでしょうね」

「マシロが言うのと笑えんな」

厨房のおじさんにチキン南蛮定食を頼みダンジヨウさんの隣に座る。

「そういえば聞きましたか？ 例のマスコツト君バスンダ君負けたらしいですよ」

「ああ、噂話程度には聞いた。それがどうシタ？」

「彼自身は雑魚なんで負けても不思議はないんですけど、倒したのがソロの新人らししくて」

「ほう」

「それにこれはオフレコですけど、無敗の女王が負けたりしいんですよね」

「興味深い話だな」

ダンジヨウさんが食べる手を休めこちらに視線を向ける。どうやら、話の続きを聞きたいらしい。

「Dゲームでソロの新人が生き残れる確率は限りなく低い。そんな中で二連勝を果たした彼はおそらく注目の的となるでしょう。僕としても気になっていました」

「なるほどつまり、そのプレイヤーを見つけたら連絡してほしいというわけか。しかし、そんなもの俺に頼まなくとも解析屋に頼めばいいダロウ？」

ダンジョウさんはいぶかしげな視線を向けてくる。確かに、俺とレインの関係はある程度知っているものからすれば不自然な頼みだ。

「…いま彼女は別の情報収集で忙しくて」

「……宝探しゲームか？」

「ええ、久しぶりのイベントですからね」

「…まあ、見つけたら連絡はしてやる。だが、わざわざ探しに行くなんて面倒な真似はシナイゾ」

「それでいいですよ。僕としてもやるべきことは山ほどありますから」

シブヤの街は嫌いだ。Dゲームのプレイヤーにとってこの場所ほど治安の悪い場所はない。昔、ギョクトともその話になったが、仕切っているクランが問題なのだ。俺もギョクトも必要に駆られれば、相手を殺すが別段殺しが楽しいわけではない。だが、この場所を仕切っているクランのリーダー…あの男は違う。あれは生粋のサイコパスだ。だからできればシブヤには来たくなかったんだがイベント会場がここなのだから仕方がない。

宝探しゲーム…。転送されてから数分で銃声が聞こえるようになり、それと同時に一般人の退去が始まった。幸いにも俺が転送された場所には敵はいなかったし、畏も仕掛けやすかったので、籠城の準備を整えながらスマホを熟読する。

「なるほど、性格の悪いゲームだな。意図的に説明を省いてやがる」

要するに参加者300人によるリングの争奪戦。終了時間までにリングを3つ以上所持していないプレイヤーは強制転送で殺される。

リングは7種類あり、それぞれ宝石の名が付けられている。

「この書き方だとクリア条件がリングを集めることだと錯覚するプレイヤーが大半だろうな」

宝を見つげ出すのがクリア条件だが、宝がリングだとは書いてない。とすると、リングの回収は宝への道標ってことかな？いや、リング自体が全くのフェイクだって可能性もある。

「どちらにせよある程度のリングは必要か。いや、その前にレイントの合流が先だな」

籠城のための準備にあまり意味がなくなったことを嘆きながらも、スマホをかざしリングが集まっている場所を探す。…とりあえずあのホテルを目指していくか。

いつも通り、黒塗りの仮面をかぶり俺は街へと駆け出した。

『イベント開始から一時間が経過しましたあ!!!様々な場所で乱戦が繰り広げられている中、一際目立っているのがこの男!!!最近はめつたに顔を見せなくなっていた謎のAランカー!!!マシロです!!!』

マリオの咆哮に、大闘技場中が沸いた。

クラブ「トリニティ」。ここではDゲームを利用した賭博が行われており、今回もまた大規模な賭博が行われていた

そもそも何故こんなことができるのかと言えば、支配人たるテミスが過去行われたイベントをクリアして報酬としてDゲームを利用した賭博場を開く権利、それに加えてイベントの参加者のワイルドカードをGMから与えられているからである。「トリニティ」の戦力はそうでもないが、政界と財界と関わりが深いクランであり、客の数は尋常なものではない。

モニターに映っているのは黒い仮面をした一人の少年とそれを取り囲む四人構成のクランだった。

マシロは囲んでいる人間の武器に視線を向ける。サングラスをか

けている男が一人、茶髪の少女が一人、ピアスをしている男が一人、細身の男が一人で合計四人だ。

全員がマシンガンや拳銃を構えている。

自身もパーカーの懐のホルスターから銀色の拳銃を抜いたマシロは、照準をサングラスの拳銃に合わせ、閃光弾をサングラスの方に軽く放り投げた。

一瞬の硬直と隙が生まれ、全員の動きが固まる。

その一瞬にマシロは引き金を引き、サングラスの手からAKを撃ち弾いた。AKはカラカラと道路を滑っていく。

勢いを殺すことなく、四人全員の手元の武器を打ち抜く。

マシロはこれで戦意がなくなればとも思ったが、やはりそう簡単にはいかないらしい。炸裂することなく転がっている閃光弾を見てこれが畏だと悟ったサングラスは今度はナイフを取り出し、マシロ目掛けて襲い掛かってきた。

この時点で、マシロは対象の捕縛を殺害に切り替えた。マシロは一切焦ることなく、拳銃をホルスターに戻し、ナイフを抜く。

その間にサングラスは距離を詰め、

「クソがー」

思い切り、上段からナイフを振り下ろす。

しかし、そんな単純でキレの悪い攻撃はマシロにはかすりもしなかった。あっさりとナイフを避け、振り下ろされた腕を掴み勢いはそのままに一本背負いでサングラスの男を床面に叩きつけた。

ズダンッ！ という派手な音を響かせ、サングラスの男はアスファルトに叩きつけられ、痛みで悶える。叩きつけると同時にナイフを投擲し、武器を拾いに行った細身を仕留める。

「ぐ、があ……ッ」

激しい衝撃と痛みにもサングラスは呻く。が、そこで手を緩めるほどマシロは甘くない。首根っこを掴まえて、自身の前に構え盾にする。

反応が遅れた茶髪は拳銃をそのまま発砲：サングラスを仕留める結果となった。すぐさま、サングラスの陰からマシロが飛び出て、茫然としている茶髪に攻撃を仕掛ける。

ピアスの男がこちらを攻撃できないように茶髪に肉薄しピアスの男を拳銃で仕留める。

仕上げるに、後ろに回った少女のこめかみに拳銃を突き付け発砲した。乾いた銃声と共に、わずか数十秒の間に四人が命を落とすとした。

『きつ!? 決まったーっ!! 強い! 強い! 強い!! 何という洗練された動きだー! 四対一で異能シギルも使わず、あつという間に制圧してしまつたあああ!!! この男を止めることは誰にもできないのかー!?!』

「「「おおおおお!!!」」」

会場が先ほどの盛り上がりをさらにしのぐほどの勢いで沸く。

その後もマシロの快進撃が止まることはなかった。

宝探しゲーム ー中編ー

「ここにまだ15個のリングがある。ヒイラギのオッサンのシギルでこのホテルを要塞化。このリングを狙ってくるヤツを迎え撃つ」

ホテル内でカナメ達はこれからの方針について話し合っていた。

「なるほど。だが畏に飛び込んできてくれるバカがいるかね?」

「別に来ないならここにあるリングでノルマクリアじゃないですか。でも多分来ますよ。いえ、間違いなく」

「だろうな、あいつはそういう強欲で傲慢な野郎だ」

リ्यूジは吐き捨てるようにレインの意見に同調した。そこには、明確なる憎悪と怒りが込められていた。

「で報酬の分配は?」

「リングですが残ったのは15個 合計3800ポイントですね」

「ヒイラギのオッサンに全額の半分を渡す。残りの半分は俺たち3人で分ける」

「私が言うのも変な話だが本当にいいのかね?」

「いいさ。一番負担が大きいのはアンタだ。貰う権利はあると思うぜ」

レインの話を聞き、カナメは結論を出す。

「俺は釈放されたばかりの身の上だ。文句は言わねえさ。エイスをぶっ潰したあとのリングは山分けでいいんだろ?」

ヒイラギだけでなくリ्यूジも納得したようにうなずく。

「どうした?レイン」

「いえ。改めてイベントのルールを見ていて気付いたのですがこのポイント表…変じゃありませんか?」

「いや別に…」

「なんかあるか?」

「男性は宝石のことなど興味が無いかもしれませんが、トパーズのポイントがラピスラズリより低いのは変です。ラピスラズリは半貴石と呼ばれる格の落ちる石で貴石であるトパーズの方がずっと効果なのです」

レインの言葉にその場にいる全員がポイント表を再度チェックする。

「それに通常 四大宝石といえばダイヤ・ルビー・サファイア・エメラルドの順になります…。一見すると宝石の順序で決まっているように錯覚しますが実際の序列とは全く一致しません」

「そんなの適当に決めただけなんじゃねえの？ただの金属の輪っかにペンキ塗ってあるだけだしよ」

リユージが反論するがレインは意に介さず説明を続けた。

「それにこのルールの文章も変ですよ。かなり不自然です。特に“ゲームがクリア出来ずに制限時間が過ぎた場合、「リング」の所有数が3個未満のプレイヤーはゲームオーバー”という一文です」

「確かに不自然だな。ゲームのクリアが何を意味しているかが分からない」

「先ほど、私の友人から連絡があったのですが、この書き方だとクリア条件がリングを集めることだと錯覚するけれども見つけ出す宝がリングだとは書いてないつと彼も言っていました」

「でもよこんな話 今はどうでもよくねえ？エイスをどう潰すか考えるのが先じゃねえか？」

ヒイラギとカナメは宝探しゲームについて考えますが、リユージはその思考を否定、話を元に戻すことを提案した。

「ところでそろそろ君の友人が到着するのではないかね？ここの入り口は封鎖してあるし中にはトラップもある。迎えに降りた方がいいと思うが」

「着いたら連絡を送るように言ってはあるが…ちようど今」

「えっ？」 助けて” って何かの冗談だよな？…この座標、ここで助けを求めている？」

「何かトラブルですか？」

「シユカからヘルプコールがきた。タチの悪い冗談ならいいんだけど」

冷や汗をかきながらも嫌な予感を押し殺してカナメはレインの質問に答える

「冗談でヘルプコールは使わないと思えますよ」

しかし、レインの回答はあっさりとかナメの淡い期待を切り捨てた。

「……ちよつと迎えに行ってくるわ。リングは置いてくからしばらくここは任せるぜ」

「分かった。トラップとバリケードを解除しよう」

「そういう話なら俺も付き合うぜ」

「すまん。助かる」

カナメの一言にあっさり賛同するヒイラギとリユージを見て、レインは焦り呼び止める。

「ちよ、ちよつと待つてください！これはそんな簡単な話じゃないですよ！窮地に陥っているシユカさんはAランカー。つまりそれ以上の危険が存在するということです。下手をすれば二重遭難ですよ!？」
「だからこそだろ。そいつ助けりや強力な戦力になる。エイスの王もAランカーだぜ」

間髪入れずリユージはレインの意見を受け流した。

「悪いレイン。親切で忠告してくれてんのは分かるけど端から仲間を見捨てるって選択肢はねえんだよ」

カナメもカナメで覚悟の決まった眼をしている。レインはその眼を見てため息をついた。その眼をよく知っていたからだ。

「ハァ、仕方ありませんね。そういう眼をしている人間が止まってくれないのはよく知っています……。私の狙撃は1km先までは十分狙えます。ホテルの屋上からできる限り援護しますので」

「ありがとよ。心に留めとく」

「ミイラ取りがミイラに、だけはやめてくださいよ」

エレベーターの前で彼らを見送ったレインの言葉は、彼らに届くことはなかった。

「駅前近辺なら十分援護可能ですね。思った以上にいい狙撃ポイントです」

眼下に見える景色を確認して少し安心した。

エイスに動きはありませんか。リングの動きばかり過信するのも危険ですが、このイベントルールならリングを手放して行動するプレイヤーは少数でしょうし。

問題はこのリングですね。マシロも言っていましたでしたが、しかしこのリングが隠された宝でないとすればただの目くらまし、あるいは真の宝への手掛かりである可能性は極めて高いでしょうし。

「これはQRコード？ひよつとして…」

血の流れが速くなったのを感じた。自分の想像が、考えが、現実味を帯びてきて、胸が高鳴った。急いで狙撃中を置き、少し遮蔽物の多い場所に移動しスマホを取り出す。

「こちらの迎撃準備は終わったが何かあったのかね？」

「いえ…ただ、イベントクリアへの手掛かりを見つけたかもしれないん」

スマホの画面をヒイラギさんにも見えるように向きを変える。

「これは…」

「何かの暗号かもしれません。意図して仕組んでいる以上、重要な情報だとは思いますが」

これはマシロが提唱した説に信憑性が増してきましたね。他のリングも確認する必要があります。

「別の数字があるな。いやこちらのリングは同じ数字か？」

「そのリングはトパーズのリングではありませんか？」

「そのようだ。種類ごとに違う数字が記されているということか？」

「確かに暗号のようだな。君の友人が言っていた説も信憑性が出てきたか。優秀な友人だね。どういった人物なのかな？」

「そうですね…一言でいえば変人です。しかも結構ダメ人間でポンコツです。朝は弱くて、だらしがありませんし、割と無遠慮ですし、変なところで天然で気が利かないです」

「そ、それはそれは…辛らつな評価だね」

「それに…彼は別段跳び抜けて頭が切れるというわけではありません。ものすごく運動が得意というわけでも、みんなあつと言わせるほどの大きな才能を最初から持ち合わせたわけでもないんです。ただ、マシロさんは強かった。そして、苦しいほど優しかったんです」
「…」

「彼は自分が劣勢になっても諦めなかったし、自分にできないことがあってもあらゆるものを利用して踏破しようとする。そんな人です。そして根つこの部分では誰よりも純粹で、優しくて…」

「君はその友人のことがとても好きなのだね」

「なっ…別にそんなことは…」

「そうかね？彼のことを話す君の表情はそうは言ってなかったがね？」

カアつと顔が赤くなるのを感じる。血が上って熱が上がる感覚は不快で恥ずかしかった。

「ふむ。すまない話を戻そうか。この数字の話だったね」

なんだか、ヒイラギさんにうまく転がされてしまった感じがして不快ですがこの際置いておきましょう。

「…カンマで始まる数列が2つあるのが気になりますね。あと9が2つ」

「手掛かりがなさすぎるな。あとダイヤとエメラルドの数字が必要という…」

「はい。仮説は立てられますが全てのリングを集める必要があると思います」

「地図の表示を見てもダイヤはまだ1個も配置されていないので先を越される心配ありませんが…」

「ゲーム開始直後に第1回のリング配置と言っていた。つまり第2回があるということだろう…」

「エイスへの迎撃態勢に1つ手を加えましょう」

宝探しゲーム ー後編ー

「ハア…ハア…ハア…。なあ、そろそろ…通してくれると、助かる…んだけど?」

「それはできませんねー」

先ほどから、俺の前に立ちふさがりホテルに行かせようとしてくれない逆十字のついた黒い祭服を纏うこの男。最初に見た時マジでやばいと思ったが案の定だったな…。強すぎる。

「いやあ、しかし。死んでもよみがえる異能^{シキル}って反則じゃありません?」

「ははっ、一方的に俺を殺しておいてよく言うぜ…。」

「いやいや、誇つていいと思うよ? 僕に一撃でも入れられるプレイヤーは稀だからさ」

方や血だらけでスプラッタ状態。方やほとんど無傷。俺は膝をつき、向こうは余裕の表情で立っている。この構図だけで、こいつと俺にどれだけの差があるかを示しているといえる。もう四回は死んだ。全然勝つビジョンが浮かばないけど、こいつを倒さなければレインとも合流できない。どうにかしないと…。

「君にちよつかいをかけたのは八割方は純粋な興味なんだ。戦ってみてわかったけど、やっぱり君はまだ手札を隠してる。もしくは使いこなせていないのかな? いずれにせよ、これ以上の戦闘は無駄みたいだねー」

「ごちやごちやうるせえよー道化!」
「おっと」

苦し紛れのナイフの投擲もあっさり躲される。

「…そういうあんたの能力もだいぶ分かってきたぜ? 弾丸を防いだ時点で念動系統の能力であることは分かっていたが、さっきの斬撃ではつきりした。お前の異能はベクトルに干渉するタイプのものだ!」

半分以上はハッターだ。正直確信に至るには戦闘回数が少なすぎる。というか、一方的にやられ過ぎた。だけど何とかして対策を練るための時間を稼がないと、マジでやばい。

「へー。結構いい線いってるねー。僕に殺されながらも見てるところは視てたわけか。彼が言う通り、確かに使えそうだねー」

「『彼』…だと?」

こいつに俺の情報を流した奴がいるのか?

「僕の異能をほぼ言い当てたご褒美に良いことを教えてあげよー今回のイベントリングを集める必要は究極的に言えば必要なのは理解してるよね?本物の宝は渋谷駅のどこかにあるんだけど、分かるかな?」

「最後のダイヤモンドのリングの示す数値が分かれば座標で特定できる」

「おおーすごいー。この分なら僕のヒントはいらなかったみたいだね。じゃあ、さらに耳寄りな情報を教えてあげよう。ダイヤモンドの番号は185911だよ」

「おい、何でそんなことお前が知ってる!?!」

まだ存在してないダイヤモンドの番号。もし本当に185911なら、こいつは何でそんなことを知ってるんだ?法則があるのか?もしくは

「さあね?お後がよろしいようですので道化の私めはこの辺で」

「まて!!!あ……………」

叫んだ次の瞬間意識が遠のき、気が付いた時には奴はもういなくなっていた。

渋谷駅構内でレインはピンチに陥っていた。

一足先に、渋谷駅についていたレインはエイスのメンバーと鉢合わせってしまったのだ。何とか脱出を試みるもあえなく失敗。左腕は折られ、王に捕まり仲間もいない。

まさに絶望的な状況だ。しかし、この絶望的な状況であつてもレインは助けが来ることを信じ時間稼ぎのために舌を回す。否、恐怖と痛みで体がこわばり、動かせる部分が舌ぐらいしかないのである。

レインは、知っていることを話せと迫ってくる王に無駄話と挑発で時間を稼ぐ。

「あなたによく似ていると思いませんか？壺中の王」

（腕を折られるのがこんなに痛いとは思いませんでしたが、思ったよりも思考は働くものですね）

痛みの恐怖に体が震えるが、頭だけは常に冷静であつた。その理由の一端を担っているのは一人の存在だろう。

「ガキがッ…まずは指をそぎ落としてやる、その後は耳だ。安心しろよ、よく回る舌は最後まで残してやるからよお！」

「……マシロさんッ」

王の異能^{シギル}虚空の王がレインに牙をむこうとしたその瞬間――

「おい」

「ああん？」

そこには少年が立っていた。一体どうやったのかもわからない。しかし、確かに包圍網を抜け一人の少年が立っていた。全身を血に染めた死神がそこには立っていた。

王が立っている位置から三メートルほどの位置。しかし、次の瞬間には王の目の前に肉薄し、その顔を蹴り飛ばした。ドガン！

およそ人体ではなるはずのないような強烈な炸裂音と同時に王は数メートル吹き飛ばされる。強烈な威力に加え、油断し切つてまともに食らったからとはいえその威力は尋常なものではなかった。

原理としては死んで再生すれば元通りになるんだから、リミッターを外して無理な動きをしても問題ないよねっという無茶苦茶な理論のもと、無茶な動きをしているだけなのだが。

しかし、それを知らないものからすればその少年はあまりに恐ろしく、狂気的に見えた。

「…マシロさん」

「ごめん、遅くなつた」

安心しきったレインは力が抜けかける。

マシロは、バランスを崩したレインをふわりとお姫様抱っこ形で抱きかかえると後ろを振り向き、声をかける。

「おい、レインのことは任せるぞ。ストウカナメ」

有無を言わせぬその迫力にカナメはあらゆる質問を飲み込んだ了承した。

「ああ、もちろんだ。それで…」

カナメは言葉が続けることができなかった。なぜなら事態が動いたからだ。

「調子こいてんじゃねえぞ!!!」

「うるせえよ」

!!!!!!

王の咆哮に我を取り戻した克蘭のメンバーも銃を構える。

「ここはどうかしてやる。ゲームはお前が何とかしろ! スドウカナメ」

「わ、分かった!」

「てめえら! 逃がすんじゃねえ! 撃て!!!」

マシロは王の脇腹にナイフを投げつけた。

浅くしか刺さらなかったそのナイフを一瞬のうちに、超接近したマシロが蹴りで押し込む。

ブシュ!

そして、右手に持っているナイフで、王の左肩を刺し穿つ。

「ガアアアアアア!」

再度ナイフで王を切り裂こうとしたマシロの腕が宙に舞う。王の虚空の王によって、斬り飛ばされたのだ。

「グッ……く、なめてんじゃねえぞ! ガキイ!」

王が転移で逃げた瞬間、手下たちの銃の乱射が始まる。本来であればそれで終わりだ。しかし、その程度でマシロは止まらなかった。

もちろん、マシロには弾丸の雨を走り抜けるスピードはない。だから、致命的な分だけ避けた。

「なっ!?」

驚いたのはいったい誰だったか。

マシロは心臓、頭部、両足を狙った弾丸以外を無抵抗に喰らった。散る血飛沫、肉体中を穿つ弾丸も関係なしと、突き進む。

迅速に動いたためだけにわざと攻撃を受け入れる姿勢は、まさに怪物^{怪物}狂人^{狂人}。

弾丸のうち一つが右足にあたる。バランスを崩したマシロはその場で倒れかけるが、すぐに疾走を開始する。

マシロの痛覚は悲鳴を上げるが、マシロには慣れ親しんだ感覚だ。腹部に三ヶ所、肩部に二か所、右足に一か所被弾する。しかし、幸いなことに足の被弾は側面をえぐられたただけだ。動かせることを確信したマシロは止まらない。

走る、走る、走る走る。

圧倒的に優勢だった王の手下たちは次第にマシロの狂気に呑まれていった。

「があ!？」

マシロから一番近い位置にいた克蘭のメンバーの首をナイフで素早く切り裂き、銃を奪う。

「痛ええええ!!!」

「グがあ!？」

死体を盾にしながら、銃を乱射。二人被弾したのを確認し、ライフルを投擲。怯んだ敵を持つていた投げナイフで仕留める。

陣形が崩れたのを確信し、再びマシロは疾駆する。弾丸の雨など存在していない様に、ただただ走る。

「王^{ワン}ンンンンン!!!」

そして、ついに王のいる場所まで到達する。片腕は切り飛ばされ、右足は弾丸に打たれ、他の部位も血が噴き出している。今にも死にそうなるマシロの目は憎悪と殺意で未だ血走っていた。

狂気に呑まれていたのは王の手下だけではない。王自身もまた目の前の怪物^{怪物}狂人^{狂人}に呑まれていた。故に、転移で躲す前にマシロの牙が届いた。

腕も足も使えないマシロは王のその首に噛みついた。

ここで顎が壊れてもいい。こいつの首を何としても噛み千切る。

それほどの覚悟と憎悪が込められた獣のごとき攻撃。王の首から血が噴き出ると同時に、マシロの首は切断され、宙を舞った。

倒れ伏す首なし死体。しかし、その勢いと狂気に王ですらすぐには言葉が出なかった。

「クソー気色悪い。おいお前ら！俺は逃げた野郎どもを追いかけるてめえらも手分けしてぶち殺せ！」

そう言つて、王は転移で消える。残された王の手下も何人かはカナメたちを追いかけるために、走り出した。

残ったのは先ほどのマシロの狂気に吞まれ、動けなくなつた者たち。

そして、一同はさらなる恐怖を体験することになる。

むくりと少年は起き上がる。纏つていた服には確かに彼の血が付着している。胴体には大量の穴が開いていた。しかし、立ち上がる。

「ヒツ……………」

何処からともなく悲鳴が上がる。それはあまりにおぞましい光景だった。そう、殺しても死なない人間など恐怖でしかないのだ。否、それは、もはや人間ではない。ただの怪物である。

時間が巻き戻るかのように弾丸は体から排出され、血と臓物と肉片が体に戻っていく。そして、再度首が宙を舞いながら切断された体の部位に戻っていく。気が付けば、傷は綺麗サツパリ消え元から死んだことなどないかのように修復されていた。

「ふう…一日で五回以上死ぬのは久しぶりだな」

「……………」

「レインの姿を見て頭に血が上ってたけど、よくよく考えれば爆弾を括り付けて人間爆弾特攻すれば、確実に殺せたな。いやあ、うっかりしてた」

「……………」

唾然。この場にいるマシロ以外の人間は言葉を発することができなかつた。マシロの異様な雰囲気吞まれ、引き金に手をかける動作すら遅れた。故に、銃声が響くことなく

「それじゃあ、クソ野郎の皆さん。さようなら」

この場にいたものがどうなったのかは語るまでもないだろう。

第5話

あの後俺がレインを探している間にゲームはクリアされた。ストウカナメが見事王^ワを出し抜いたらしい。ざまあ見やがれ。

とりあえず、カエデさんの治療を受けるため負傷したレインを抱えて、ダンジョウ拳闘倶楽部に駆け込んだ。

しかし、レインの腕を見て冷静さをやはり失っていた俺は返り血や自分の血で汚した服を着ていったものだから、ひと悶着あった。

ひとまず、ダンジョウさんに落ち着けと怒られて、冷静になってからレインから詳しくカナメたちのことを聞き、状況を把握した。

結果として、レインは普通に病院で処置を受けることになった。カエデさんの薬師^{ヒールンググレイス}恩寵は肉体を元通り繋げることも可能だが、あくまで自然治癒を高めるだけなので、あまり意味がないらしい。

ストウカナメはダンジョウさんと交渉の末、同盟を結ぶことを目標に鍛えてもらっている。他のメンバーは待機といった形だ。

「明日、《保険屋》のカネヒラと連絡を取ってヒイラギさんの娘さんに保険金が支払われるのかの確認に行ってきます」

ダンジョウ拳闘倶楽部の一室で、レインと今後の行動のすり合わせをする。

「それはいいけど、結局ストウカナメのクランに入るって決意は変わらないのか?」

「ええ、こちらとしても利益のある提案です」

「まあ、将来的なことを考えれば確かにストウカナメに賭ける価値はあるのかもしれない。無敗の女王もいることだしな」

「ええ、それに王と事を構えてしまった以上同じく敵対しているメンバーの中で最も戦力があるクランに所属しておきたいところですから…それよりも」

「ん?」

「そろそろ放してもらえませんか?」

今の俺がどんな体勢かといえればレインを膝にのせて、後ろから腕を回して抱きかかえているという状態だ。レインの身体はいつも温か

く命を実感できる。俺の^{ハーデス}不死神は確かに強力な異能ではある。Dゲーム内で勝利または殺した人数分の命のストックを手に入れることができ、ストックがあるうちは殺されても死なない。

どれだけ欠損しようと、どれだけおかしくなろうと死んで蘇れば元通りに戻っている：不死の^{シギル}異能。こう見えて汎用性は高いし、使いたくないけど奥の手もなくはない。確かに、一見チートに見えるかもしれないが、それ相応の代価が付いている。

死んだ回数によるがその後のフィードバックがきつい。具体的には言えば、睡眠時に過去の自分の死亡体験を追体験させられる。しかもかなりリアルだ。性格の悪いことにその時の感情も痛みも再現される。

昔は何度か発狂しかけた。苦しくて怖くて、自殺したこともある。が、質の悪いことに死ねないのだ。この^{シギル}異能は。蘇生に関してはon、offが随意的にはできないのだ。

マジでレインがいなかったら、精神的に壊れていたことだろう。かなり慣れた今でも死んでから数日は寝れない。五回も死ねば、三日間は悪夢が続くだろう。最悪だ。あの道化野郎許せねえ。

「もうちょい待って。今回は割と跳ね返りがきつくて」

「……………今回は何回死んだんです？」

「五回は死んでる。一人ヤバいのがいたんだ。他のやつらには一回も殺されなかったんだけどな」

「そうですか…」

「……………」

「ありがとうございます」

ちよつと気まずい空気が流れ始めると、突然レインがお礼を言ってきた。

「なんのお礼？」

「王^{ワン}から助けてもらったことバタバタしてお礼し損ねていたので」

「別に俺がしたくてしたことだし、レインが襲われてたら助けないって選択肢はないしな」

「……………」

俺の服の裾を掴んで少し泣きそうになりながら考え込む姿は庇護欲を誘うが、こっちも泣きたくなるので話題をそらすことにした。

「それにしてもレインは小さくて抱きやすいわー」

「…喧嘩売ってるんですか？私もう中一なんですけど」

「いやいや、俺からすればコンパクトなサイズでちょうど…降りますよ？」はいすいません」

段々と俺を見るレインの目がゴミを見る目が変わってきたので、この辺でやめておこう。他のことで話題をそらさないと…。

「花屋の娘さんに会いに行くって言ってたけど、実際に会いに行くのか？」

「いえ、保険金が支払われるかの確認しか頼まれていませんので、直接会う気はありません」

「そっか…」応言っておくけど、レインが感じるべきは責任感や罪悪感じゃなくて、感謝の念だけだぞ。置いていかれる側の悲しみや絶望に同情するのも共感するのも仕方ないけど、責任を感じたってレインにはどうしようもなかったことだからな」

「…分かっていますよ」

相変わらずの無表情でそっぽを向くレインはあまり納得しているようには見えなかった。

「なあ、イヌカイ」

「ああ？なんだよ？」

「マシロってどんな奴なんだ？」

ダンジョウに頼み込み自分を鍛えてもらうことと同盟を組むこと

を提案し、ひとまず訓練をつけてもらえらることになったカナメは、イヌカイに訓練をつけてもらっていた。

いつもの訓練の休憩時間。カナメは汗ばむ体をタオルで軽くふきながら、床に横になっているイヌカイに気になっていることを尋ねる。

「俺に聞くのかそれ？解析屋にでも聞けばいいじゃねえか。只ならぬ関係っぽそうだし」

「そう思っただけけど、しばらくは二人にしてやれってダンジョウさんに言われてな」

「ダンジョウさんがねえ：俺が知ってることなんて大したことねえぞ？」

「一応聞かせてくれ」

「本名は知らねえが、プレイヤーネームはマシロ。ダンジョウさんと同じくAランクのプレイヤーで日本ランキングは6位。一時期ここにも通っていたらしくて、実力はダンジョウさんと互角らしい。俺が知ってるのはこのぐらいだ」

「あんまり役に立たねえな」

「喧嘩売ってんのかてめえ！」

「冗談だ」

（それにしてもランキング6位か。シユカとそろってランキング上位が二人。幸先がいいな）

「ああ、もう一つ噂があったな」

「噂？」

「解析屋について過剰に調べまわると死神に消されるってやつ」

「物騒な噂だな」

「だけどあの様子じゃ噂はほんとみたいんだな」

「ああ、確かに」

カナメはレインを王から助けた時のマシロの迫力を思い出して納得する。自分に向けられた感情ではないのにもかかわらず、殺されると錯覚するほど密度の濃い怒気だった。

「ま、余計なこと考えないで今は強くなることを考えるんだな。じや

ねえと、ダンジョウさんは納得してくれないぜ？」

「そうだな」

イヌカイの言うことももつともだと考え、カナメは頭を切り替え再び訓練に戻った。